

近世前期における領国貨幣について

榎 本 宗 次

はじめに

一、領国貨幣の存在

二、近世初頭の領国貨幣

三、津輕藩の領国貨幣

1、津輕銀の種類

2、領国貨幣としての津輕銀

3、津輕領国銀と幕府貨幣

四、加賀藩の領国貨幣

1、加賀藩初期の領国貨幣

2、領国貨幣の統一

3、加賀藩における錢遣い

五、領国貨幣の廃止

まとめ

はじめに

近世封建社会における貨幣の問題としては、従来、撰錢禁制⁽¹⁾、幕府統一貨幣の鑄造発行⁽²⁾、貨幣改鑄⁽³⁾、藩札などについて主として考究されてきた。⁽⁵⁾しかし幕府貨幣と共に約一世紀の間、諸藩において流通した領国貨幣についての研究はその緒についたばかりといえよう。小葉田淳氏は幕府の貨幣統一策の完成が寛文・元禄期であり、その間、大名領国で領国内の金銀が貨幣として通用した事実を指摘し、⁽⁶⁾また伊東多三郎氏は近世初期貨幣史研究の必要をとき、近世

近世前期における領国貨幣について(榎本)

初期の領国貨幣についての概観をなされておるのであるが、各藩の個別的な研究は二、三の藩を除いては必ずしも進んでいるとは云えない。

領国貨幣が近世初頭の各領国経済に主たる役割を果たすのは勿論であるが、それは幕府側から見た場合も軽視することの出来ない存在であった。中井信彦氏は幕府の貨幣政策を初期と中期以降にわけ、初期については次のように述べておられる。「全国流通貨幣の発行権独占をもつて経済的な権力の支柱の一つとしていた幕府にとって、その貨幣政策は、初期においては前代から引続いて流通していた領国貨幣(主として極印銀)と錢とを消滅させて幕府貨幣に統一することに眼目がおかれ」たと。また渡辺信夫氏は元禄の貨幣改鑄を機として、最終的に全国の通用貨幣が幕府貨幣に統一されるが、それまでの「幕府貨幣と領国貨幣の併用は、単に貨幣制度の問題としてだけでなく、一定度の貨幣経済の発達に支えられる幕藩経済の構造、それを基礎とする幕藩制確立期の商品流通を理解する上で不可欠の問題であるといわなければならない」⁽⁹⁾として併用期の具体的研究の重要性を指摘しておられる。拙稿はそうした諸先学の問題意識に導かれながら、領国貨幣についての一斑を明らかにしようとするものである。

註

(1) 藤田五郎「封建社会の展開過程」第二章撰錢禁制と貨幣改惡

(2) 小葉田淳「日本の貨幣」(日本歴史新書)、田谷博吉

「近世銀座の研究」、作道洋太郎「近世日本貨幣史」、遠

藤佐々喜「再吟味を要する江戸時代貨幣研究の基本問題」

(経済史研究第三号)、日本銀行調査局編「江戸時代における幕府鑄造の金銀貨幣について」

(3) 伊東多三郎「江戸幕府正徳の貨幣改鑄」(社会経済史

学一八の六)「江戸幕府元文の貨幣改鑄」(史林三八の三)

(4) 作道洋太郎「日本貨幣金融史の研究」

(5) しかし問題によっては必ずしも解決されたとはいえない。例えば貨幣改鑄について伊東氏は「従来の研究では、元禄金銀はただ品位引下げによる財政難打開策として、批判されているが、これは貨幣流通量の相対的不足による商取引の渋滞、物価の騰勢に対して、金銀流通量の増加と領国貨幣の最終的整理によって、全国的流通市場の確立に大きな影響力を及ぼす(藩政史研究会「藩制

成立史の綜合研究「米沢藩」という観点から改鑄を検討すべきことを述べ、また中井氏は「宝永年間の相次ぐ改鑄は、すべて銀貨の増改鑄であつて、金貨には手をふれていないことに注目しなければならない。銀に対する金の比価の低位に悩みつづけてきた幕府は、銀貨の品位低下と量の増加によつて、銀の価値を引き下げようとしているのである。三宝銀までは、上方の経済力が銀貨の増加を消化していたのであつたが、極端な悪貨である四宝銀の大量によつて、銀貨の価値は遂に崩落し去つたのである。それは、寛文・延宝・天和・貞享・元禄・宝永と続いた上方の銀経済圏の繁榮に一つの終止符をうつた画期的な事件であつた。そして元禄文化の名で呼ばれる上方文化の華は、ここに至つてその経済的基盤をうしなひ始めたといふことができる」(「金と銀」「国文学解釈と鑑賞」二十八の十五所収)と極めて興味深い説を披瀝された『五匁銀から南鐐銀を貫く貨幣政策の基本をな

一 領国貨幣の存在

貨幣は近世初頭において、幕藩体制の成立の当初から必須の存在であつた。伊東氏が前掲の「管見」の中で、述べておられるように大名領地支配による多量の年貢米の売却、俸禄制による兵農分離の完成と家臣団の編成、大部隊の軍備と征服戦争、壮大な居城と城下町の建設、参勤交代制の実施など、すべて貨幣経済の力なしには遂行し得ないも

近世前期における領国貨幣について(複本)

していたのは、「すぐれて徳川氏の貨幣」である金貨をもつて本位貨幣とし、銀貨を錢と共に金貨に従属する補助貨幣たらしめようとする意図であつたと思われる」とし、関東の金遣い、上方の銀目建てという江戸時代経済の二重構造が一元化されていく過程の中でみておられる。(「五匁銀と南鐐二朱銀」歴史教育十三の十)

(6) 小葉田淳「日本の貨幣」

(7) 伊東多三郎「近世初期の貨幣問題管見」(「国民生活史研究」2所収)

(8) 山口啓一「秋田藩成立期の藩財政」(「社会経済史学」二四の二)、伊東多三郎前掲論文、「米沢銀の流通」(「藩制成立史の綜合研究、第五章第五節」)、「津輕銀小考」(「弘前大学国史研究」二十四号)、渡辺信夫「確立期藩経済と領国貨幣」(「幕藩制確立期の商品流通」第五章)

(9) 「五匁銀と南鐐二朱銀」

(10) 渡辺、前掲書

のであった。それ故藩制成立の当初から金銀の取得に狂奔したのは大部分の大名に共通せる傾向であり、それが一方では領内の鉱山開発、貨幣の鑄造、流通市場との連絡となつてあらわれ、その政策の成否が藩制成立に重大な関係をもつていた。⁽¹⁾

そのような欲求の対象となつた貨幣は、なんらかの形で領国で作らなければならなかつた。それは伊東氏の指摘する如く一つには慶長金銀の原料金銀が幕府及び諸大名使用の額を鑄造し得るほど多量に集荷することは出来なかつたし、また一方慶長金銀を短期間に諸国に流通させることはできなかつたからである。慶長金銀が幕府の賜与、貸借、領内産金銀との引換及び流通市場を通して、諸大名の手に入手されつつあつたとしても、それだけでは近世初頭のコメ銀貨幣の需要を満たすことはできなかつた。ましてや年貢諸役の代金銀納、運上金銀の徴収によつて慶長金銀を吸収できるほど領国内にその流通が進んではいゝなかつた。とすれば領内産金銀を開発し、その通用政策をこうじなければならなかつた。そして領国金銀貨幣を鑄造することは、ひいては幕府統一貨幣を取得する手段ともなつてゆくのである。したがつてまた、領国金銀貨幣の問題は近世初期の特殊なものではなく諸藩に共通するものであつたといわねばならない。

諸藩の領国貨幣、特に領国銀⁽²⁾についての資料として、すでに紹介されているものとして寛文八年京都銀座役人狩野七郎右衛門が幕府に呈出した(a)「灰吹遣之国々より出申候灰吹丁銀に吹立申覺」⁽³⁾があり、ついで元禄か享保期のもものと推定される銀座書留の(b)「諸国灰吹位付」⁽⁴⁾がある。次にその一部について紹介されているものとして(c)「明和八年諸国灰吹寄」⁽⁵⁾がある。次表は伊東多三郎氏の作成されたa・bの表にcの灰吹寄を追加して作製したものである。この表によつて寛文・元禄段階の諸国灰吹銀の全貌と、その位付を知ることが出来る。

寛文狩野書上			諸国灰吹位付			明和諸国灰吹寄		
国名地名	種類	産鋼	地名	種類	品位 (及び備考)	地名	種類	品位 (及び備考)
摂津		合目多 三ツキ	大坂	銅銀 地灰吹花降 上銀	上+0.03, +0.02, 下+0.01 下-0.02~-0.1 +0.095 -0.045~-0.3, ± 上+0.06(7), 中+0.04(5) 下-0.03	多田	多田寄七銀 同銀 同降同歩 能勢山銀 地灰	+0.06(7)~-+0.03(4) ±~-0.2 +0.02(3)~-+0.05(6) +0.02(2), -0.02(3) +0.1, +0.08
伊勢			伊勢山 治田	坊主吹 花降 川合持参灰吹	+0.02(3)~± -0.02(3) +0.03(4) +0.08(9) ±, +0.1 +0.05	伊勢山 治田		上+0.03, 下+0.01(2) +0.03(4)~-+0.05(6)
武蔵						秩父郡 明平山銀		+0.1
常陸			水戸	上銀	+0.095, +0.09	水戸	水戸上銀	+0.08(9)
美濃			郡上	山銀	+0.01(2), +0.03(4), +0.05(6) +0.01(2), +0.03(4), +0.05(6)	郡上	山銀 山銀上	+0.02(3) +0.02(3)~-0.05(6)
飛騨				御蔵銀花降 同山銀 常上銀 芦尾銀 寄	+0.098 +0.03(4) +0.02(3) 上+0.05(6), 中+0.03(4) 上+0.02, 下-0.06 上+0.02, 中+0.5, 下+0.4 上+0.089, 中+0.068, 下+0.053		御蔵銀 吹 中寄七吹 同山銀 同坊主吹 梅銀	+0.098 +0.075 +0.03(4) +0.02(3), ±, -0.02 上-0.07(8), -0.12(3) -0.15~-0.17
信濃			井川	山銀	+0.02(3), +0.05(6) ±~-0.02(3)		山銀	+0.02(3), +0.04(5), ±
				半ヶ岡程灰吹 前々は銀山あり 灰吹参る。近年 不参。	-0.14(5), -0.2(3)		キアソ吹	上-0.05(6), 中-0.12(3) 下-0.3(4)
下野							芦尾銀	上+0.02(3), 中±, -0.01(2) 下-0.04~-0.08
陸奥							津輕山銀	+0.01, +0.02, ±, -0.1
津							津輕極印銀	+0.03, -0.04, -0.05
松							津輕上銀	+0.02~-+0.04
福島							仙台山銀	+0.05, ±

近世前期における領国貨幣について(概本)

			会津 御蔵銀 降銀 カフリ銀 坊主吹銀 上カフリ銀 カフリ吹銀 (岩代カ)	-0.1~0.16, -0.03 +0.095~ +0.09 +0.02~±, -0.02~-0.06 -0.05, -0.06 上+0.09, 下+0.013 -0.02~-0.07 上+0.02, 中±, 下-0.04 上+0.05, +0.06, -0.14 上±, 中+0.025, 下-0.04 上+0.09, 屋敷銀+0.1	会津 御蔵銀 ボタ吹 山銀 福嶋 ヒバラ タラギ ホバラ 寄せ銀	+0.1 上+0.2, 0.3, 中±~-0.03 下-0.5, -0.6, 大下-0.1(0.2) 上-0.02, 下-0.04, -0.05 上+0.01, +0.02, 中-0.02(0.03) 下-0.07~-0.1 上-0.02, -0.03, 中-0.04 下-0.1~-0.2 " " 上-0.03, -0.04 上-0.06, -0.07 大輪、土和田山銀、小坂金山 花輪、土和田山銀、小坂金山 大込金山などあり その他陸奥には野沢、尾瀬川、秋山、五十沢、黒森、半田、信夫	
出羽米	新極印灰吹 元極印灰吹 上灰吹 極印上灰吹 極印中灰吹 極印下灰吹	8.5 5 22 15 13 11.5	米沢 秋田 延沢 宮下	龜甲極印 密銀 火雪花印 佐竹 密灰吹	-0.02, -0.03 上+0.09, 下+0.015 上+0.03, 中+0.02 下+0.01, 大下± 上+0.06, +0.07, 中+0.04(5) 上+0.02 上+0.09, +0.07, 中0.05(6) 上+0.095, 中+0.08 上+0.05~6 上+0.03中± 上々+0.05, 上+0.02 中±, 下-0.05	米沢極印 秋田山銀 院内火雪銀 極印銀	±, -0.02~-0.04 上+0.07(8), 中+0.04(5) 下+0.01(2) +0.03~+0.07 古上+0.02(3) 新上+0.02 中+0.01~± 秋田極印銀には野田、湯沢、野代、角館、院内、六郷、菊田、増田、柳手、飯館、大阿仁、湯尊あり 花降+0.095, 上+0.05(6) 中+0.03(4), 下± 上+0.01~2, 中-0.03~4 下-0.07(8)
越前			外山	銀 "坊主吹	上+0.07(8), 中+0.05(6) 下+0.04, ±, -0.02~3 -0.02(3)~-0.2(3) -0.02~-0.1	大滝村山 大越果平	+0.1 +0.1
加賀	花降灰吹 朱葉紙灰吹 (加賀、能登)	22.5 8	加賀 山銀 坊主吹 外山吹	上銀 "坊主吹	上+0.07(8), 中+0.05 下+0.02(3), 大下±~-0.15 上±, 中-0.02(3), 下-0.07~-0.12+0.05~-0.03	西谷上銀 坊主吹 敷賀溜り 敷賀印銀 山銀蔵谷	古上+0.025, 新±~-0.01 (敷賀類の極印あり)

加賀	越中)			上銀生隆 極印古 新銀印助吹 さきい	+0.095 +0.025 +0.03(4) -0.05(6), -0.07		外山銀印 彦四郎極印 雲枚銀 栗葉極印	-0.01~-0.04 ± +0.05(6)
越中		新山	上山 山寄	銀銀 銀銀	+0.02 +0.095 +0.02(3) +0.02(3), -0.02(3)		山銀(外山銀) 山坊主吹	+0.095 +0.02(3), ± -0.02(3)
越後新 村高	極印上灰吹 極印中灰吹 極印上灰吹 極印灰吹	8 4 22 -8	上田 村高 柏崎・ 糸魚川	實之字 永之字 電 定丸在所 シカミ	+0.098 -0.25 -0.2 -0.22 -0.22 -0.1~-0.15(6), -0.18, 中-0.2 下-0.33 -0.06(7) 南田下同シ		御蔵銀 元長之字極印 志高 新柏 村上山銀 イト井川 白峯御道上銀 黒川虎丸山銀	+0.098 -0.02~-0.04 -0.06(7) -0.4(5)~-0.05(6) -0.2 -0.25 -0.2(但丸總極印同位) -0.03(4), 中-0.05(6), 下-0.13(4) -0.2 +0.098 -0.09, -0.1
佐渡	上灰吹	22	佐渡	御蔵銀 銀銀 上後から吹 御山同吹廻 ツ	+0.04, +0.05(6) +0.05(6) +0.095 -0.17(8)~-0.3(4) -0.2(3) -0.05(6)	佐渡	御連上銀 後隨極印 山銀 婦すま吹 古佐渡銀 ら	+0.1 +0.095 +0.02(3) ±, -0.05(6), -0.07(8), -0.1~-0.25(6) +0.07(8) -0.1~-0.3
丹波			卯苗 山之口	寄石山花降 銀 山花降 山花降 下±, -0.04(5)	+0.03(4), +0.05, -0.03(4) -0.05(6) -0.2, 上+0.05(6), +0.03 -0.02(3), -0.05(6) +0.1, 中+0.02, +0.05(6) 下±, -0.04(5)	卯苗 苗	判吹 道ヶ城山銀 山野口山 川北山 氷上銀 寄七銀 知木谷	上+0.03(4)~-0.04(5), -0.15(6), -0.2 -0.03(4), -0.08(9), -0.1 +0.02(3), +0.05(6) +0.03(4)~-0.07(8) -0.2 上+0.02(3), 中-0.02(3)~ -0.05(6), 下-0.1 -0.03(4), -0.02(3) -0.05(6) +0.06(7)~

但馬	上灰吹	19	元但馬 錢師上野 通伴同 出石 新	寄	+0.02(3), +0.04(5) +0.093, 中+0.04~+0.07 下+0.03(4), 下々-0.03(4) -0.02~-0.05 +0.095, +0.05(6), +0.02(3) ±, -0.02(3) -0.1~-0.13(4), +0.03, +0.15, ± +0.04(5), -0.1	生野御連上銀 商人 山出 銀石 ±	+0.0816 +0.04(5)~+0.07(8) +0.02(3), ±
因幡	以前ハ灰吹遣 近年ハ丁銀遣		甚兵衛吹 宅丁目 宅丁目 竹田		-0.1~-0.2(3), -0.04 -0.17(8), -0.13(4), -0.1 -0.05(6)	極印銀 同宅町目 鯉宅町目 鯉宅町目 竹小手銀 井	上-0.05(6), -0.1 下-0.08(9), 中-0.12(3) -0.2 -0.35~-0.6(7) -0.55(6)~-0.08(9) -0.25~-0.3 -0.1~-0.15(6)
伯耆						山	+0.02~+0.04
出雲			木爪判		-0.1~-0.17(8), -0.3	水瓜判 山銀	上-0.1, 中-0.16 下-0.2~-0.4 -0.04(5)~-0.1
石見	上灰吹	22	御公用 やなせ えきみ		+0.03(4), +0.02(3)± -0.06(7), -0.01(2) 上-0.02(3)	御連公用銀 山銀 (やなせ) 石州御藏銀 吉天又	+0.0736 上+0.05(6), ± 下+0.02(3), +0.04(5) 下±, -0.06 -0.05(6), -0.1 +0.1
美作	以前ハ灰吹遣 近年ハ丁銀遣		寄	銀	+0.04(5)	寄七銀	+0.04(5)
備後			銀寄	判	上+0.05(6), +0.02(3) +0.02(3), +0.04(5) -0.04(5)~-0.06 -0.093	山七銀 七銀 判	+0.02(3) +0.02(3), +0.04(5) -0.05(6)
長門			萩金灰吹			萩	
豐後	灰吹遣, 前々 は鎮山あり, 灰吹参る近年 不参		寄柳石	銀源吹 大下-0.03(4) +0.02(3), ± -0.05	+0.035, 中+0.025, +0.01 大下-0.03(4) +0.02(3), ± -0.05	山七銀 七銀 灰	+0.02(3), 中±, 下-0.02(3) 上±, 下-0.01~0.03

日向	極印上灰吹 極印中灰吹 極印下灰吹	16 14 10	密	銀	+0.02(3), +0.04(5), ±, -α	山	銀	±, +0.01(2), +0.03(4)
対馬	上中灰吹 下灰吹	22.5 20 14	上	銀	上+0.07, +0.05(6), +0.02(3) 下-0.02(3)	山	銀	上+0.06(7), 中+0.03(4) 下±, +0.01
伊豆				伊豆	上+0.098, 中+0.07			
備中				赤坂部 日向	上+0.02(3), ±~-0.02(3) 上+0.06(7), ± 上+0.03, 中+0.02, 下+0.01 下々小半~-0.04			

(附記)

○「差銅」灰吹銀に銅を加えて丁銀に製造する場合の割合、津極新極印灰吹の場合差銅5は百目につき五匁の差銅、したがって吹立丁銀は一〇五匁となり、差銅が多いほど、その灰吹銀は良質

○「歩入」「歩出」「歩引」「釣替」

慶長銀と灰吹銀を引替える場合、灰吹銀一貫目に対して慶長銀一匁増（一貫百目）を一割入といい、八歩増、三歩増の場合を八歩入、三歩入或いは八歩出、三歩出といい、逆の場合を歩引とし、同等のときを釣替といった。表では歩入を+、歩引を-、釣替を±であらわした。

註

- (1) 伊東多三郎「近世初期の貨幣問題管見」
- (2) 領国貨幣は「三」の例外を除いて、その殆ど全部が銀であった。
- (3) 森田柿園「加藩貨幣録」所収
- (4) 国会図書館上野支部所蔵
- (5) 「明和八年諸国灰吹寄」

特許庁図書室所蔵。その凡例で御運上銀、御蔵銀、花降銀、諸国上銀、山銀、寄せ銀、地灰、灰吹銀の歩出し

近世前期における領国貨幣について(模本)

歩引の説明をしたあとに、「後世新銀山出灰吹銀於在之者、後人可有加筆者也 干時明和八卯年霜月 清生(長銀見役 金谷喜左衛門の号)と記し、そのあとに第一部として「諸灰吹銀国寄せ」二十七ヶ国の灰吹銀についてその種類、銀の品位、それに極印銀の場合には、その極印を图示している。第二部では灰吹銀以外の地灰、塩銀、屑上銀、銀道具、銀小判、銀毫分、銀錢、国末勘異国銀について、夫々图示し、灰吹同様に歩入、歩引で品位をつけている。なお異国銀には交趾烏銀、元宝足紋

銀、安南銀、紅毛錢(ジャガタロペイ、ハロフデカト
ン)などがある。

「狩野書上」と「諸国灰吹位付」は元禄改鑄及びそれ以後の
丁銀鑄造のために作製されたものであろうが、この「明

和八年諸国灰吹寄」も、南鐐二朱銀の鑄造される直前のもの
であるから、その準備及び参考のために書上げられた
ものであろうか。但しここに見える極印灰吹銀の大部分
は寛文・元禄期およびそれ以前の残存物と考えられる。

二 近世初頭の領国貨幣

「寛文八年京都銀座書上」、「諸国灰吹位付」、および「明和諸国灰吹寄」などによって、諸国の領国銀の分布をみた
のであるが、ここに記載された領国銀が、そのすべてということは出来ない。先にも述べたように領国貨幣の需要は
近世初期の各藩に共通するものであるから、各領国に存在し得る、或は存在すべきものだったと思われる。⁽¹⁾そこで近
世初頭の領国貨幣の一例として前掲の資料にあらわれてこない荘内藩の場合についてみることにする。同藩では先に
別稿で述べたように酒井忠勝入部の翌々年の寛永元年に米札制度が確立され、家中の蔵前知行制の体制が出来上った。⁽²⁾
。米札制度とは当時の郡代柴谷武右衛門の建策になるものと伝えられ、領内の貢納米は蔵入地、家中知行所の別
なく、鶴岡・加茂・酒田の米倉に納め、家中の知行は平均免をもつて米札で支給し、家中は支給されたこの米札をも
つて飯米に換え、余分の米札は時の相場で金銭に換える仕組であった。この米札制度は蔵前知行制の基礎を築くこと
になるが、同時に米札は領国貨幣的役割を果していたと思われる。しかし米札だけで領国貨幣の需要が満たされてい
たとは考えられない。

ここで酒井氏の入部する以前の最上氏支配の荘内地方についてみると

(A) 覚⁽³⁾

一、百六拾三匁九歩者 駒口五ヶ月分

一、百貳拾貳匁者 と、嶋がいか拾壹駄分

メ貳百八拾五匁九歩者 銀子

此永錢四貫貳百八十文 但壹匁ニ付拾五文ツ、

一、四拾八匁五歩者 役綱之銀子

但此銀子ハからかねたま五千七百、くろかねたま貳千七百、ちや五斤、永錢百五十文ニ而取之

(中略)

右之通請取候者也仍如件

慶八極月十三月 志村伊豆守光安 花押

(B) ①駒口役銀并飛島いかの銀之事⁽⁴⁾

合四百七拾六匁四分

此内貳百貳拾壹匁四分 但駒口

同 貳百五拾五匁ハ 但と、嶋島賊代銀

右請取則鉛銀候、山かたへ為上申者也仍如件

慶十三月極月十日 進藤但馬 花押

②売渡古之御船四數買代銀之事⁽⁵⁾

近世前期における領国貨幣について(複本)

近世前期における領国貨幣について(複本)

合十数者 但四百三十目也

右受取山形御蔵江指上所実正也仍如件

元和五年四月三日

斎藤筑後守

高橋伊賀守

寺内近江守

買主 木嶋又右衛門殿

指南 加賀 与 助殿

同 上林七郎左エ門殿

鑑屋惣左衛門殿

(C)

尚々銀一貫七百十毫匁六リンたるへきと存事ニ候已上

今度殿様江戸江被成御上候付而、鶴岡此方ニ

御座候金銀為上候由昨晚御状参候、其方預銀早々爰元江御越可然候 恐々謹言

九月二日

斎藤筑後守 花押

高橋伊賀守 花押

二木与助殿

寺内近江守 花押

人々御中⁽⁶⁾

まずA、B①にみられるように役銀を永銭と共に「からかねたま」、「くろかねたま」、或いは鉛銀で納めていることがわかる。またB①・②・Cによって、徴収された銀が山形や江戸に運ばれていることが判明する。ここで「からかねたま」、「くろかねたま」は「是ハ鉄炮玉之事ニハ有之間敷候、唐金くろかねをも銀子のことに通用⁽⁷⁾」したものであり、鉛銀は精選されない灰吹銀と推定されるが、いずれも地金そのもので通用⁽⁸⁾している。

近世の金銀貨幣は、そもそも其の材料たる地金の価値に依存するものであったが、領国貨幣の場合とくにその傾向が強かった。南部藩や仙台藩で、砂金を領国貨幣として使用していたことはその典型であるが、銀についてみても山出しの灰吹銀や無極印の灰吹銀が流通していた⁽¹⁰⁾。荘内の鉛銀もそのようなものと思われる（が、このように地金そのものが通用することが諸藩の領国貨幣の存続した原因の一つと思われる）。元和八年最上氏が改易された時、荘内藩に受理された「小物成目録⁽¹¹⁾」によれば、「銀八十六匁 灰吹役」とあり、領国内で灰吹銀の鑄造されていたことがわかるが、ついで出てくる銀百九十匁 いか役、銀三貫五百八十七匁 漆代、銀五百四十匁 蠟代、銀三百四十五匁 綿ノ代、銀百五十八匁七分五厘 山手塩代、銀貳百八十六匁四分 野手代等の銀は領国貨幣たる灰吹銀であったと考えられる。

そして元和八年以降酒井領になった後も、灰吹銀は使用されていた。寛永四年のものと推定される「戌之年御預ケ之御城米目録⁽¹²⁾」に

表ニメ四千六百八拾貳俵四斗六升貳合ハ納五斗入

此銀四拾貳貫百四拾四匁六分ハ灰銀但壹俵ニ付九匁八

近世前期における領国貨幣について（覆本）

大豆三拾四石八斗四升ハ 有大豆

表ニメ六拾九俵三斗四升ハ 納五斗入

此銀四百八拾七匁八分 但壹俵ニ付七匁八

貳口銀合四拾貳貫六百三拾貳匁四分ハ灰銀

とあり、また「遊佐郷高橋太郎左衛門江戸ニ而指上候目安」(寛永十一年)の第十二条に「酒田と申処家千四百軒も御座候所ニ而丁野と申萱野ヲ前代少々谷地御年貢済し蒞申候ヲ只今留谷地ニ被成、家ヲ持申候町人ニハ縦後家ニ可有候共、札壹枚ヲ上銀貳匁宛ニ御渡被成候……」とある。そしてこれら灰吹銀の原鉱の産地の一つは、寛永八年酒井忠勝の預地となった左沢領であつた。「寛永九年末ノ御物成払帳左沢三ヶ郷」に「三拾表 銀山へかし米」とあり、寛永十一年の「出羽国最上之内左沢酒井右近上給米之御勘定目録」に「一金拾八両ハ 漆山御運上 一金貳両ハ銀山御運上」とある。そしていま一つは立谷沢の瀬場谷である。また小葉田淳氏は「延沢銀が多量に羽前諸地へ出廻つたであろうことは想像できる」と述べ、寛永・正保年間の或る時期に盛時をむかえたとみられる延沢銀山(現在の山形県尾花沢銀山新畑)と羽前諸地との關係を想定しておられる。

このように灰吹銀は領内に流通していたのであるが、役銀や運上として徴収された灰吹銀は領内において金貨幣や丁銀などに両替されるだけでなく秋田藩の場合のように、江戸に送られ、ここで公貨に替えられることがあつたと思われる。次にあげる資料はそのことを暗示するものではなからうか。

もくろく⁽¹⁸⁾

1 小判貳千両

河合茂右エ門もたせ参候但箱貳ツ

2 小判五千両

村尾勘兵エ、大塚又左エ門、佐久間十郎右エ門、成瀬孫十郎もたせ参候はこ貳ツ

- 3 小判六百九拾四兩壹分 御家中十四き登申候時もたせ参候
- 4 小判八百兩 最上御城米ノ代酒井因幡殿より請取
- 5 小判貳百五拾七兩 とりの年ノ払残金水野内蔵助所より請取
- 6 庄内上銀五百目 右同断
- 7 まめいた銀百七匁五分 右同断
- 8 大判拾貳枚 右同断
- 9 まつ前すな金貳つゝミ 右同断
- 10 大判貳拾貳枚 江戸にてめさせられ候しふや伝右エ門所より請取
- 11 小判百兩 庄内より五左エ門もたせ参候
- 12 上銀壹貫三百目 右同断
- 13 丁銀貳拾貫目 御拝領銀はこ式ツ
- 14 小判五千兩 庄内より高尾六右エ門、はか惣左エ門もたせ参候
- 15 以上
- 16 七口
- 右小判合壹万三千八百五拾壹兩壹分
- 内五千八百四拾四兩貳分はらい申候
- 残テ八千六兩三分御座候
- 二口

右上銀合老貫八百目

内五百目はらい申候

残テ老貫三百目御座候

(以下略)

この目録の目附は「いぬノ十月廿日」となっているが、目録中の人物からみて寛永十一年と判断される。⁽¹⁹⁾ これをみると15、小判一万三千八百五十兩を筆頭に多額の金銀が国元庄内より運ばれていること、13、丁銀貳拾貫目が賜与されていること、10、大判貳拾貳枚が江戸で調達されていることなどが判明する。そして銀の中には6、庄内上銀五百目と12、上銀老貫三百目があるが12も庄内上銀であることは16、二口右上銀合老貫八百目とあることによって知られる。このように江戸まで領国灰吹銀が運ばれていることは、これらの灰吹銀によって幕府貨幣を調達し或いはそのままの形で支出していたことを窺わせる。

註

- (1) 「京都銀座より幕府への言上書(寛文八年狩野書上)にて見れば、寛文八年頃までは、諸国の諸藩中凡領分十万石以上の面々は、各自に領内通用の貨幣を自製したりと聞ゆ。」(加藩貨幣録)
- (2) 大瀬、斎藤、榎本「鶴岡市史」上巻、山口啓二「藩体制の成立」(岩波講座、日本歴史・近世2)
- (3) 永田家文書一(酒田市史料篇三)
- (4) 永田家文書四
- (5)・(6) 二本家文書(雞肋篇 第八十三冊)
- (7) 永田家文書二〇
- (8) 滝本誠一「日本貨幣史」九七頁
- (9) 渡辺信夫「幕藩制確立期の商品流通」八二頁
- (10) 小葉田淳「日本の貨幣」九九頁、また「寄合帳」(米沢市立図書館蔵)寛永廿一年九月五日の条に「国印なし銀其町くにてとり候て検断ニ預置候」とあり、正保二年六月廿二日の条に「旧冬極印なしの銀を町ニておさへ取候て検断ニ預置候」とある。
- (11) 「筆濃余理」(鶴岡市立図書館蔵)
- (12) 雞肋編卷五十四

(13) 「大泉紀年」、「雞肋編卷百三十六」、「鮑海郡誌」

(14) 雞肋篇、卷百三十一

(15) 瀬場谷におゐてなまり山見立申候、弥精をいれつるに

つき候様ニ普請可申候、若^(わ)いきより申上候とも承引申間
敷候、山繁昌^(寛永三年)候ハ、ほうひ可申付候者也

寅卯月^(寛永三年)二日 武右エ門 甚十郎 但馬守

瀬場村

瀬場金子堀共当年者水出候而普請ニ手間取候間、吾人ニ
付拾五匁宛之札銀拾三匁宛貳百人分四百目差置候間來春
雪消候ハ、早々普請仕、金堀出し可申者也

酉極月十八日
(寛永十年)

武右

甚十

瀬場五人之年寄

三人のおとな
三人之肝煎中

(雞肋篇、卷百六十)

(16) 小葉田淳「延沢銀山史の研究」(「史窓」二十三号)

(17) 渡辺信夫氏の前掲書三二六頁所載の表によれば、慶長
十七年から寛永九年までの間に領国銀の現送は二十件余
にのぼり、その額は凡そ千三百貫にのぼる。

(18) 雞肋編卷五十四

(19) 雞肋編の編者加藤正従は「寛永十一ナルベシ」と註し
ているが、更に史料のなかにみえる人物をみると、水野
内蔵助は当時の家老、また「達三公御代分限帳」によれ
ば、大塚又左衛門は御使者番衆三百五十石、芳賀惣左エ
門は百五十石。

三 津輕藩の領国貨幣

1 津輕銀の種類

先にあげた京都銀座、江戸銀座の書上げなどにあらわれた津輕銀を列挙すると

1 新極印灰吹 百目に付此銅五匁丁銀合百五匁(寛文八年諸国灰吹)

2 津輕極印銀 上五歩引一割三、四歩引(諸国灰吹位付)

3 山銀 一、二歩引一三、四歩引、一割引(諸国灰吹位付)

近世前期における領国貨幣について(梗本)

4 津輕銀 上五歩入、中八歩引、下一割引、下々一割二歩引(諸国灰吹位付)

5 津輕山銀 壹、貳歩出し、釣替、四五歩引、大下壹割引(明和八、諸国灰吹銀寄)

6 津輕極印銀 三、四、五歩引(明和八、諸国灰吹銀寄)

a、扇面「弘前」の極印 上 三、四歩引、中 五、六歩引

b、木爪型「弘前」の極印 上 三、四歩引、下 四、五歩引、六歩引

c、小判型「宝」の極印 六、七歩引、壹割四、五歩引、貳割五六歩引

d、矩形「尾太」の極印 貳割引

7 津輕弘前切銀 (三貨図彙)

8 奥州津輕弘前銀 (大日本貨幣史)

9 津輕弘前切銀 (金銀図録)

10 津輕尾太銀 (金銀図録)

このように数種類の津輕銀があったのであるが、この中で1、新極印灰吹と4、津輕銀上とは同一のものと判断される。1は百目に差銅五匁即ち4の津輕銀上の五歩入と一致する。また6のaの中、bの下、及び6のCは2の津輕極印銀に包摂されるものであろう。また7、8、9は木爪型「弘前」の極印が見えるから、6のbと同一のものとされる。そして10は6のdの系統であらう。山銀の方は壹、貳歩入から壹割引にいたるまで雑多であるが、これらは極印はないが、先に述べたように地金そのものとして流通することが考えられる。

このようにみえてくると津輕領内で通用した津輕銀は三、五種類であったと思われる。夫々の発行年代及び流通期間については不明であるが、尾太極印銀については「津輕藩日記」延宝五年三月十五日の条に「をつぶ御銀山極印之文

字尾太二字御極則書付唐牛与右衛門に渡之 右之文字小見山元益考之」とある。唐牛与右衛門は延宝三年二月に鉾山奉行に命じられているが、その唐牛に尾太鉾山産出灰吹銀の極印の名称の決定を知らせているわけで、これによってみれば尾太極印銀の上限は、ここに求めることができる。

また6のa、b、cの中で「寶」極印銀は「弘前」極印銀の後に出したものであるらしい。「明和八年諸国灰吹寄」に「弘前ヲ後ニ吹直ス」とある。

これらの津輕銀はいずれも切遣いされたものであった。「明和八年諸国灰吹寄」に津輕極印銀をならべたあと「右いづれも厚ク大吹ニ而五六七拾匁切割ニ而遣銀也」と記し、「津輕俗説選」は東郡青木氏の両撰金銀譜を引用して、「津輕銀 切て使ふと云……弘前宝字銀此に銀重さ六七十目に鑄て切て使ふ」とあり、造幣局所蔵の奥州津輕弘前銀や「三貨図彙」ならびに「金銀図録」の津輕弘前切銀の図からも、切遣いされたことが知られる。

この切遣いは相当の少額までなされたと思うが、これらの切遣銀のほかに豆板銀に相当するものがあつたようだ。「弘前藩日記」延宝三年正月八日の条に「御町中ニ而細銀払底ニ成候」とある。この細銀は碎銀のことであろう。「経済録」巻五・食貨に「当代銀幣ハ国初以来二品アリ、一ツニハ銀錠ナリ、二ツニハ碎銀也、……碎銀ハ大小齊シカラズ、重サ二三分ヨリ四五錢ニ至ル。其形豆ノ如クナル故ニ、俗之ヲ豆板トイフ」とある。津輕藩の細銀ハ碎銀が、どのようなものかを知り手掛りとして、青木昆陽の「昆陽漫録」所収の「露銀」がある。

露銀ト云フアリト聞ケドモ、何国ニテ使ヒシヤシラザリシニ、或人云ク、元来津輕ニ花露銀 花銀トモ云フナリ ト云フアリ。位ヨロシ形豆板銀ノ如クニシテ、大小アリ。大ナルハ胡桃ノ如クニシテ、上円ク下タイラカナリ。上ノ円中ニ、罌粟子、アルヒハ胡麻子ノ如クナルアルニヨリテ、花露銀ト名ヅク。極印ノ有無ハ覚エズ。今モ通用スルヤシラズト。露銀ハコノコトナルベシ。

註

(1) 弘前市立図書館所蔵

(2) 同日記延宝三年二月六日の条

(3) 「津輕俗説選」(青森県叢書第一編) 後々拾遺

(4) 「大日本貨幣史」附録卷五、古金銀貨部第二には石州

細銀が載せてあり、縦七分二厘、重九分二厘とある。

(5) 日本經濟大典 第九、五二四頁

(6) 日本經濟叢書 卷三十三、日本隨筆大成卷一〇

2 領国貨幣としての津輕銀

これまで銀座關係の諸記録を中心に津輕銀についてみてきたのであるが、次に領国内の史料には、どのようにあらわれるかを検討してみよう。

先ず津輕藩の「御定書」⁽¹⁾をみると「次銀」なる銀が散見する。

○寛文四・十一・六 御國中酒造御役米京升拾石に付次銀六匁宛。

御留山之儀者不及申候、明ヶ山之うちも無油断廻り候て山入之人足改御判紙不取紛入もの之は老人に付御役次銀、式匁請取御代官かたへ相渡可被申候事

○寛文四・十二・十六 御國中居鯖之者共御役銀先年相定之通老人に付本役は次銀、老枚、半役は式拾三匁宛請取可被指上候事

○寛文四・十二・十六 間役銀請取之刻、船之大小目積に相定候而は不同在之由に候、船に構無之、水主員数相改老人に付先規のことく御役銀三匁宛次銀にて請取可被申事

○寛文五・十一・十一 御藏百姓諸役之定 一、御役油耆軒に付納升五升宛出候事、今度納升五升入之升にて耆ッ御百姓斗則とをかけ指上を可申事、其外こほれち里候分者御百姓取可申由可被申渡事、但銀にて上ヶ申候者次銀、式匁宛上ヶを可申候事

○寛文六・四・十

自然肴物出候節御役銀之覺

- 一、生鯿 壹駄ニ付 御役次銀、壹匁七分宛
- 一、鯿子 " " 貳匁貳分 "
- 一、干鯿 壹束 " " 五分 "
- 一、目刺 壹束 " " 三分 "
- 一、生鯿 壹駄 " 壹匁 "

(以下略)

川御役定

- 一、やす 壹丁 御役次銀、貳匁貳分
- 一、大やな 壹つ " 拾壹匁
- 一、小やな 壹つ " 五匁五分

(以下略)

(傍点筆者)

その他、外浜山入役、木綿新物古手拾歩壹御役、西浜より他国江塩之出役、御役真綿、鳥役などすべて次銀で徴収されている。(次表参照) この次銀は他藩の下銀⁽²⁾にあたるものと思われ、先に掲げた「弘前」極印(6a b)「寶」極印(6c)など新極印銀より一段品位の劣る津輕極印銀に相当するものと推定される。

次に新極印灰吹銀(1)と津輕銀上(4)に相当するものと考えられるのが上銀である。上銀は普通一割入を云うが、⁽³⁾1や4が五步入であつても6a、6b、6cなどと比較した場合、八歩から一割一步の品位のひらきがあるの

次銀にて徴収される役銀

役 銀 名	単 位	次銀	役 銀 名	単 位	次銀
1. 酒造御役	拾 石	6 匁	きみうお	壹 駄	2.2
2. 外浜山入役	拾 壹 人	2.0	きゅるおか	壹 駄 本	0.5
3. 箇 役	一 壹 箇 人	3.5	鯨 の り	拾 壹 駄 本	1.1
4. 間 役	一 壹 人 人	3.0	10. 川 御 と 役	壹 駄	1.1
5. 面 役	壹 人 人	1.0	夏 や 役	壹 駄	11.0
6. 塩 出 役	拾 壹 表	2.0	や す な な	壹 丁	2.2
7. 御 役	拾 壹 軒	2.0	大 や や	壹 丁	11.0
8. 御 役	壹 軒	2.0	小 さ と	壹 丁	5.5
9. 肴物御役	壹 駄	1.7	秋 な て	壹 丁	3.3
生 鮓	壹 東	2.2	ふ ん 立	壹 丁	3.3
鮓 子	壹 東	0.5	な か し あ	壹 丁	2.2
干 鮓	壹 駄	0.3	手 持 網	壹 丁	2.2
目 生	壹 駄	1.0	大 ま き	壹 丁	1.9
干 し ん	壹 駄	2.2	ゆ く り	壹 丁	1.9
生 海 鼠	拾 壹 本	1.7	11. 鳥 役	壹 駄	2.2
鱈 鯛	拾 壹 駄	1.1	春 鳥	壹 駄	5.5
鯛 鯛	壹 駄	2.2	秋 鳥	壹 駄	11.0
干 鮫	壹 駄	1.7	冬 鳥	壹 駄	11.0
干 鮫	壹 駄	1.7	12. 居 鯖	本役壹人	5.5
み か き 鮓	壹 駄	2.2	野 手 秋 米	半役壹人	1 枚
鮓 引	拾 尺	1.7		壹 軒	23.0
塩	拾 尺	2.2			2.6

近世前期における領国貨幣について(榎本)

(資料 津輕藩「御定書」寛文四～六)

一一一

で、津輕藩では、これをも
って上銀としたのである
う。寛文の「御定書」に次
のようにでてくる。

○寛文四・十一・六 炭
屋きかま御役銀先年相定
之通老人前付而上、銀三匁
六分宛請取可被差上、但
かま壹つに付竈師老人宛
ハ前廉之通、御役赦免に
可被申付候

○寛文六・四・十 御国
之町人松前へ参り候節御
印取候ハ、出役老人ニ付
テ上銀貳匁宛

○寛文六・五・十七

覚

一、春網壹艘之御役

上銀五匁并
くしこ三十けた
ほしかすへ 壹枚

一、鰯網壹艘之御役

上銀拾匁并
ほしいはし 本升三斗
ひしこ 壹桶
塩いはし 五表

一、台網壹艘之御役

上銀五拾目并
ほしいわし 本升壹斗
ひしこ 壹桶
塩いはし 拾俵

(中略)

一、引鰯網壹艘之御役 上銀貳拾目

(以下略)

(傍点筆者)

やな、手持網のような川役が次銀で、引鰯網や台網が上銀であることから小額のものは次銀で、それ以外は上銀とも考えられるが、炭焼竈役三匁六分、松前出役貳匁が上銀であり、逆に居鯖役が本役次銀一枚、半役二十三匁とあるから額の高下によったものとは云えない。だが前出の表でみたように役銀の大半が次銀で徴収されていたことは確かである。

次に上銀とも次銀とも記さず「灰吹銀」とのみ記したものに次のような例がある。

a、「元禄三年十月津軽伊織上ヶ地御取ヶ并小役米銀窺帳」

(中略)

米四石五斗壹升

野手役

近世前期における領国貨幣について(根本)

米貳石五升

役油之代

灰吹銀貳貫六拾壹匁三厘

春山作り人足代

灰吹銀三百三拾四匁六分四厘

夏山作人足代

灰吹銀三百壹匁七分貳厘

立木代

灰吹銀百貳拾目五分八厘

礎代

灰吹銀九拾八匁四分

山漆実代

灰吹銀六拾五匁六分

役綿之代

灰吹銀四拾壹匁

役麻之代

b、「津輕郡之内所々米并金両替相場目録」

一、上米壹石ニ付灰吹銀貳拾四匁替

津輕郡之内城下弘前土手町

一、金壹両ニ付 同銀七拾貳匁七分替

同断

一、上米壹石ニ付 同銀貳拾九匁六分五厘替

同郡藤崎村

一、金壹両ニ付同銀七拾貳匁五分替

同断

(中略)

米壹石ニ付貳拾七匁六分五厘

五ヶ所平均

金壹両ニ付七拾貳匁貳分四厘

同断

右之通当年十月分米銀相場平均如此ニ御座候 以上

(元禄三年)

午 極月

平井九八郎 印判

戸田佐五郎 印判

田山藤左エ門 印判

永田作太夫様

a の資料に役綿之代、野手米、役油米とあるが、役綿は前にみたように次銀で徴収されており、野手米は「野手秋米壹斗壹升宛上ヶを可申事、但銀子にて上候ものハ次銀貳匁」また役油米についても「但銀にて上ヶ申候者次銀貳匁宛上ヶを可申候事」とあれば、a にでてくる小役銀としての灰吹銀はすべて次銀と考えられる。またbの資料では灰吹銀の両替は七拾壹匁四分から七拾貳匁七分で五ヶ所(弘前土手町、藤崎村、板屋野木村、浪岡、黒石)平均では七拾貳匁四分四厘であるから、これも上銀とは思われない。延宝二年の両替相場によれば、敦賀 小判一両銀六十匁、大津 小判一両六十匁四、五分、江戸 小判兩替五十九匁二分であり、また津輕では元禄九年の丁銀相場は六一匁六分五厘であるから、当時裏日本の丁銀(及び豆板銀)相場は一両六〇一六一匁替であった。とすればbにでてくる灰吹銀は丁銀より品位の高かった五歩入の津輕上銀ではなく次銀に相当するものと思われる。

なお、ただ銀としるしたものは、慶長銀か津輕銀か判定しがたいが、小役の殆んどが領国貨幣としての津輕銀であることから、少くとも次のような場合は次銀ないしは上銀であったと推定される。

弘前町人夫定 貞享四年十二月五日(津輕旧記抄)

一、上役一軒ニ付 九十人 此銀二百二拾匁八分

一、中ノ上役一軒ニ付 七十七人 〃 百七拾七匁一分

一、中役 〃 六十七人 〃 百五拾四匁一分

一、下役 〃 五十人 〃 百拾五匁

近世前期における領国貨幣について(梗本)

一、下々役 //

三十五人 // 八拾匁五分

二、地子銀町一軒二付

銀拾五匁より五匁迄

小役の殆んどが領国銀であり、更に石代納分も銀納であったことは「銀納田」「銀納畑」といった田畑のあることから知られる。⁽⁹⁾ しかも先に述べたように銀貨の切遣いの他に細銀もあったから、小額のものにまで銀遣いがなされたと思われる。そのせいか後世の記録では、近世前期の津輕藩では「中興迄」金銀通用であつて錢遣いがなかったとい⁽⁹⁾ ている。錢遣いが全然なかったということには疑問が残るが、銀遣いが主流であつたことは確かであろう。

(補) 後世の編集になるものであるが、「信牧公御代日記」⁽¹⁰⁾ には「元和五年 今年新錢多廻り候間、唐錢不足になり申候、尤唐錢の一倍出申候」とある。この新錢を「寛永通宝」とすれば、この記録は明らかな誤りとなるが、元和二年、同八年の撰錢令の中にみえる「新惡錢」——草間直方は「按ルニ、此新惡錢トアルハ、天正・文祿・慶長ノ錢ナルベシ」としている——とすれば、元和年間錢遣いが相当あつたという意になる。なお、この新錢を「慶長通宝」・「元和通宝」とすることは出来ない。小葉田淳氏の説かれるように両通宝とも、その鑄造發行についての確実な史料に欠けているからである。

しかし寛文年間になると、次に掲げる史料が示すように、錢遣いに関する史料が散見し、銀とともに通用したことがわかる。しかも従来、銀納であつた石代納分や山役銀などの一部が錢納化しつつあつたことも窺われる。そして錢貨は箇役(木綿新物、古手綿、茶紙、細物等櫃壺箇につき)、間役(水主員数壺人につき)、面役(水主以外の入国者壺人につき)などとして「他国より多ク入候」ものがあつた。⁽¹¹⁾ また支藩黒石藩では正徳四年四月十五日平山内杣入用として味噌貳千百貫目、たばこ千二百把、木綿五百五十反、古手百、蠟燭二箱、茶四本、酒百五十樽、絞油二樽、鉄十箇、鍋大小二十枚、鋤百四十枚、鎌百四十、薄縁蓆などと共に錢拾五貫目を移入するため青森沖口野内の関所を通

過させることを願いでている。⁽¹²⁾

○寛文五年乙巳五月廿日、錢一分五文遣ニなる一文目五十文也〔津輕旧記類〕五。⁽¹³⁾

○寛文六年四月六日御町中錢遣五文に被仰付、是迄遣申候、就夫御町中にて諸商売仕候者共、錢銀之高下又ハ銀子入用之節、錢払申候ヘハ殊之外高下御座候て迷惑に存候間、五文半に取遣申様に被仰付被下度由御奉行申上候事〔津輕藩日記〕

一、銀納田一反歩ニ付鐐錢一貫文より二百五十拾文まで
一、銀納畑一反歩鐐錢百八拾文より三拾文迄

山税

一、式間六寸角一本 鐐錢百五文
一、薪割木六尺四方 鐐錢九十文
一、村方仕立山 三百坪ニ付鐐錢拾文

〔貞享四年十二月五日、津輕旧記抄〕

註

(1) 津輕家文書〔文部省史料館所蔵〕

(2) 米沢、糸魚川などには下銀についての資料がある。なお次判(なみばん)という名称があることから、次銀は「なみぎん」と呼称されていたものであろうか。

(3) 「明和諸国灰吹銀寄」の凡例に「諸国ニ上銀と在之候者、毫割出シ迄、無之八九歩出シ位をも上銀と云ひ訓候、

近世前期における領国貨幣について(榎本)

是者其所銀ニ而上下之心ニ而上ノ銀と唱付候事」とあり

また「銀位並銀吹方手続書」(吹塵録)には「銀之位毫割入を上銀と定め、夫より位劣候を歩入と唱、或は釣替とも唱、又至つて下品を歩引之位と唱候事」とある。

(4) 津輕家文書

(5) 「御定書」寛文五・十一・十一「御蔵百姓諸役之定」

(6) 「津輕史」雑部(青森県史卷一)

- (7) 青森県史、卷二
- (8) 「津輕制度略、乾」文部省史料館所蔵、「津輕旧記抄三」(青森県史卷二)
- (9) 「津輕制度略」には「錢遣ハ古来銀遣の処、十八代信政の時より六文を以て壹分とし、六拾文を以て壹文目と定めるなり」
- (10) 文部省史料館所蔵
- (11) 津輕藩日記、寛文六・四・六の条に「右之通五文半ニ可仕候、但、御国錢不足ニ付、五文遣に申候処ニ今程ハ錢他国より多ク入候由に付て望之通り町奉行へ申渡ス」
- (12) 同日記
- (13) 文部省史料館所蔵

3、津輕領国銀と幕府貨幣

津輕藩における領国貨幣と幕府貨幣との関係については、すでに渡辺信夫氏が「幕藩制確立期の商品流通」の中で触れている。その要点をあげると、

1、幕府貨幣(小判)の領内流入は津輕産米の代金として、領外流出は上方、北国方面からの移入品の代金としてであった。

2、津輕銀の江戸現送は行われなかったと思われる。むしろ、領内流入の小判を江戸に現送し江戸入用費等にあっていった。津輕藩でしばらく行われている小判両替値段の調査の目的の一つはそのためのものであった。

3、有利に小判を獲得するために、青森と鯉ヶ沢港で徴収した役銀を御納戸に納めるに際し、常々両地の小判相場を見て下値の時に小判から壹分判金に両替しておくよう金蔵奉行に命じている。また、藩が商人に貸付けた材木入付銀を小判で返すように求め、あるいは、藩が直接小判の買上にあたっていた。

そして渡辺氏は「確立期幕藩領主経済の領外支出を蔵米の領外販売に直結させ、中央市場、畿内の特殊性を強調することは一面的で、領内での貨幣取得、主に領国貨幣の取得と江戸現送の機能を加味」すべきことを強調しておられ

る。「中央市場、畿内の特殊性を強調することは一面的で」ということについては問題が残るが⁽¹⁾、「領内での貨幣収得、主に領国貨幣の収得と江戸現送の機能」を見逃すことは出来ない。荘内藩の江戸現送については先に触れたが、米沢藩などの半石半永制も、そうした視角から把握すべきものと思われる。

そこで渡辺氏の説に關して史料を追加する意味で「津輕伊織上ヶ地」關係の一連の史料によりながら津輕領内での貨幣収得についてみることにする。預地ゆえ、津輕藩の貨幣収取そのものではないが、その収取の条件と過程には類似したものがあると考えられる。

津輕伊織は元禄二年に早世、後嗣なきため采地を召しあげられ、その地は津輕藩の預地となった。その預地は津輕郡のうち小屋鋪村、馬場尻村、飛内村、下目内沢村で高千七百七石四斗三升七合六夕、取米六百六拾四石四斗六升三合であった。幕官永田作太夫⁽³⁾は、この物成について「江戸廻者難成候間」という名目のもとに「御年貢江戸廻者致し無用」所⁽²⁾にし金納させることを目論み、そのため米直段、金両替相場について「越中守家来」に相談をかけ、次のように十月、十一月の相場目録を提出させている。(十月の目録は前節にて引用)

津輕郡之内所々米并金両替相場目録

一、上米壹石ニ付灰吹銀貳拾四匁三分壹毛替	津輕郡之内	弘前土手町
一、金壹両ニ付灰吹銀七拾貳匁六分五厘替	同断	
一、上米壹石ニ付同銀三拾目壹分貳厘替	同郡	藤崎村
一、金壹両ニ付同銀七拾貳匁五分五厘替	同断	
一、上米壹石ニ付同銀三拾目四分五厘九毛替	同郡	浪岡村

(中略)

米壹石ニ付貳拾八匁四厘九毛

五ヶ所平均

金壹両ニ付七拾貳匁貳分四厘

同断

右之通当年十一月分米銀相場平均如斯御座候 以上

午ノ極月

平井九八郎 印形

戸田左五兵衛 印形

田山藤左衛門 印形

永田作太夫様

その結果、十月の五ヶ所平均は米壹石につき二十七匁六分五厘、金壹両につき七十二匁二分四厘、十一月は米壹石につき二十八匁四厘九毛と十月より三分九厘九毛高、そして金壹両は十月と同値であった。それ故、永田作太夫は、次の史料が示すように、① 十一月の平均直段を採用し、これに更に一石につき銀三匁を加えて所払をさせ、② 上納は金子をもってすることについて勘定所に窺書を提出し、③ 裁許されている。

① 右是者先達而奉得御下知候津輕越中守御預り所奥州津輕郡之内四ヶ村当午ノ御年貢米并小物成如此御座候、米銀直段之儀彼地所々当十月十一月両月之相場承候処十月分直段者下直ニ御座候、十一月直段平均米壹石ニ付灰吹銀貳拾八匁四厘九毛、兩替平均者金壹両ニ付灰吹銀七拾貳匁貳分四厘ニ相当り申候、然共米直段之儀者右平均直段ニ壹石ニ付銀三匁高之積り御払被仰付可然旨右家来申候間、三匁高之積り米壹石ニ付灰吹銀三拾匁五厘兩替兩替直段者之通可然仰付候哉奉窺候、則両月所米銀直段平均之書付別紙ニ差上ヶ申候以上

元禄三年午十二月

永田作太夫印

御勘定所

② 覚

一、四ヶ村御物成金納被仰付候間売払之儀、納置候米百姓共ニ相渡、百姓共勝手次第第払せ、毎年十月、十一月之御直段積を以、金子ニ而取立可申候

③一、右物成米江戸廻者難成候間、金納可然旨前方申渡候、米直段兩替直段共ニ其年十月十一月兩月之所直段書付毎年極月中ニ差出可被得下知候事

ところで、こうした金子上納は農民の所払いというプロセスのみで可能であつたろうか。農民の「米売出」が、どのようにしてなされたか判明しないので推測の域をでないが、領国内での流通貨幣が領国銀が主であつた時点では、「金子上納」のためには水戸時代の佐竹氏の場合にみられるような「金商人」その他の商人によつて換金されたのではなからうか。

註

(1) 同書についての中井信彦氏の書評(社会経済史学三三

の四)

(2) 津軽家文書

(3) 「寛政重修諸家譜」卷千五十五によれば、寛文十年石

見銀山奉行、天和元年大番、元禄六年代官

(4) 水戸市史 上巻七一三頁

四 加賀藩の領国貨幣

1 加賀藩初期の領国貨幣

森田柿園は「加藩貨幣録」⁽¹⁾の中で加賀藩の貨幣について、次のように概観している。「さて天正以来凡そ八十余年、加能越三国の人民融通する処の貨幣其の員数夥多なりしかど、悉く皆封内鑄造の金銀にて、幕府製の金銀は一切

近世前期における領国貨幣について(複本)

融通せざりしを、五世参議従三位綱紀卿の時に至り、諸鉾山も追々衰微し、且時世の変遷に従ひ、寛文九年封内にて貨幣鑄造方をとどめて、幕府製の貨幣と引かへ、是より天下一統通用金銀を以て融通する事とは成れり」

森田柿園のいう天正年間の貨幣鑄造については詳かにすることは出来ないが、文禄年間には、すでに判金の鑄造が行なわれ能登銀座のようないくつかの銀座があり、天秤役を納めていることが次の史料によってわかる。

能申遣候。仍年々判を仕上金之事、沙汰之限り悪候て、行末にて一切とらず候間、成其意向後念を入候而可判を候、以来悪候は、可成敗候間為屈申聞候也。

文禄二年三月二日

利家判

能登銀や 後藤五郎左衛門⁽³⁾

守山銀天秤役之事

合銀子五枚者

右請取之处如件

文禄五年閏七月二十七日

利長判

清兵衛⁽⁴⁾

森田柿園は「加能越三州の遠所にも、夫々銀座を置きて」とし、其の場所を、加賀国は能美郡小松町、能登国は鹿島郡七尾町・鳳至郡宇出津町、越中国は礪波郡今石動町・新川郡魚津町の五ヶ所を挙げている。このうち能美郡小松町については、「国初遣文」⁽⁵⁾に、

能美郡中天秤職之事、申付之条、金銀とも如前々、全可裁許者也。

慶長五年十一月五日

利長判

小松大文字屋源兵衛方へ

とあるが、慶長六年幕府貨幣の發行される以前において、金銀貨の鑄造されていたことが窺われる。そして慶長六年以降については「慶長十年天秤役良子四十枚之内請取良子事」、寛永元年の「天秤座四ヶ所惣賃指上申御帳面之目録」等の史料から、貨幣鑄造の続行されていたことがわかる。そうした貨幣には「今極之御本銀」とか「今極金子」それに「ちゞ見銀」と呼ばれるものがあり、その他領外からの取込銀があった。これらの極印金銀、特に極印銀が領内に広く流通していたことは、白山川、みなと河、てどり川、ふとうげ河、河井川、その外在々の枝河の河役について、慶長六年五月、銀子五枚と定められ、また慶長七年十二月、江沼郡山中温泉の湯錢銀子七百目を山中百姓が納めていること、慶長八年六月、能登口郡の軒役を百姓一軒について三匁つつ取立てゝいること、寛永二年、六年の蠟燭役が銀で徴収されていることなどによって知ることができる。⁽¹¹⁾

⁽¹²⁾ 寛永元年二月の「代官諸給人心得」の中に「諸給人小役召置候事、其品々により最前相定直段を以、百姓手前より銀子に而可召置候事」とあるが、このように「百姓手前より銀子」にて徴収することは、領内における銀貨の広汎な存在によつてはじめて可能なことであつた。しかも、銀貨は極めて小額なものにまで使用されていたことは、次にあげる酒の通帳によつても知ることができる。⁽¹³⁾

寛永三年

酒之通

平野や 印

桶屋九介殿

一匁

諸白三升

近世前期における領国貨幣について(榎本)

近世前期における領国貨幣について(模本)

但十二月廿七日に参候、遣おたみ

正月十日 三分五りん 同一升

十三日 三ふん 同一升

十九日 九ふん 同三升

同日 六分 同二升

二十日 六分 同二升

同日 三ふん 同一升

(以下略之)

また金貨の鑄造については先にみたが、これら判金は藩外での使用及び進献・贈答に主として使われたであろうが中には領内の運上にあてられることもあった。

寛永二年分小松町絹織機運上金子之事⁽¹⁵⁾

合八枚者 今極金子

右請取候所、追而御印に取替可遣之者也

寛永二年十二月朔日

寺西若狭守

駒井中務少輔

絹屋方肝煎 覚兵衛等

なお金貨についてみれば、幕府貨幣たる小判を獲得するために、藩が貨幣納を小判をもつてさせ、或いは領国銀を江戸まで運んで交換したり、また領外から買調えさせたりすることについては先に述べたが、加賀藩では次のような

例がみられ、領国貨幣と小判との交換の一端を窺うことができる。⁽¹⁶⁾

「国事雜抄」

朱染紙封銀二十貫目、小判兩替に今月五日に渡し被遣候、其銀子を以、小判三百二十五両かひ被上候、并半銀子

十七匁六分五厘相添、御前江指上申候、其心得可有候 恐々謹言

(寛永十四年)
丑閏三月十日

黒坂吉左衛門⁽¹⁷⁾ 名判

てんひんや彦四郎殿

同 八左衛門殿

註

(1) 藩貨幣研究の代表的なもので、文久三年四月に上梓された「三州宝貨録」三巻を「越中鉾山雜誌」などの資料によって増加訂正して五巻とし、明治三十四年五月刊。拙稿では、昭和十年、石川県図書館協会より出版されたものを使った。

(2) 「天秤職は即ち銀座にて、銀座は天秤を専用となすが故に、銀座は天秤座と呼べり」(森田、前掲)、「江戸初期には諸藩において、天秤屋・銀座などが極印銀の封包を行った……」(小葉田「日本の貨幣」百二十五頁)

(3) 加賀藩史料卷一、四六二頁(以下加藩史料とする)

(4) 森田、前掲書

(5) 加藩史料卷一、八三〇頁
近世前期における領国貨幣について(複本)

(6) 同卷一、九四四頁

(7) 同卷二、五二一頁

(8) 同卷二、五三二頁「小松旧記」に「寛永二年分小松町絹織機運上金子之事 合八枚者 今極金子」云々とあり同卷一、八八九頁「万治巳前御定書」に「分国中諸商売之事、此已前如有来、ちゞ見之銀子にて可令取沙汰、自然はいふき於相渡は、其時々相場次第、歩を入請取渡可致候」とある。

(9) 同卷一、八四〇頁

(10) 同卷一、八七二頁

(11) 同卷二、五三二頁、六〇五頁

(12) 同卷二、五〇七頁

(13) 同卷二、五三九頁「国事雜抄」、このような小額な銀

は後に述べる「こまがね」・「きりがね」であったと思われる。

(14) 慶長六年九月晦日、徳川秀忠の女珠姫金沢にて前田利常に入興した際の「御供衆へ利長公より被遣おぼえ」の中に金子百二十枚がみえる(加藩史料一の八四四頁)

(15) 加藩史料、卷二、五三三頁
(16) 同 卷二、八三七頁
(17) 御傍衆七百石(寛永四年侍帳) 加賀藩初期の侍帳・石川県図書館協会

2 領国貨幣の統一

先にみたように加賀藩の初期領国銀貨幣には「今極之御本銀」、「ちぎ見銀」、「取込銀」などがあつた。また「明和八年灰吹銀寄」によれば「古キハ式歩半出し」から「新キハ釣かへ壹歩引」の種々の極印銀があり、また極印の型も、夫々種類の異なる「菊極印」があり、梅鉢に改の字、円に浅、栄の字、巴があり、栄螺極印があり、用介・太右エ門と記すものなどがある。また、表に「花降」「次郎兵衛・彦四郎」、裏に「百目」と記し、円に桐の極印を刻した「彦四郎極印」、「花降」「拾両」と記し、同位にして「銀目四拾三匁アル故」「壹枚銀」と称されるもの、それに宝・座・具など三種の極印を不規則に刻した極印銀がある。その他「式三步出シ釣かへ位」の山銀蔵谷、「壹式歩入る三四歩引」の外山銀、越中の分としては「九歩半出し」の上銀、「式三步出シ位釣かへ位」の山銀、それに「式三步引」の坊主吹などがある。

これらの諸銀のなかには寛永十年の丁銀と釣替の新極印銀もあり、またそれ以後の銀をも含むと思われるが、領国銀の種類は秋田と同様に多かった。なお「諸国灰吹位付」にも山銀、坊主吹、外山吹、上銀花降、極印古、新銀曜助吹、ささい(栄螺)などがある。

なお史料に屢々みえる「朱封銀」とは菊紋の極印銀を封したものと⁽¹⁾いわれる。⁽²⁾(大日本本貨幣史附録) こうした領国銀の外に先にあげた「取込銀」があつた。これは藩外からなんらかの形で流入してきた銀であり「御

分国中取込候銀子善惡不同」なものであった。このように取込銀が流入し、しかも領国貨幣と併用されていることは、各藩の領国貨幣は必ずしも領国内に限定して通用していたものではないことを物語っている。「明和灰吹銀寄」にみえる「敦賀溜り」もまた取込銀の一つの呼称であろうが、それについて「灰吹銀寄」には「但敦賀、此所ニハ銀山なし、諸国ノ廻船船頭買物代ニ諸国灰吹銀持チ集ル」と説明を加えているように、敦賀を経由して流入する可能性が多かった。

このような雑多な取込銀を吹直し、銀位均等の銀貨幣にして領内に通用させようとするのが、寛永十年四月十二日の「御定」と、同十七日の算用場奉行所に令した「寛⁽³⁾」である。

(1)御分国中取込候銀子善惡不同について、三ヶ国一般に被仰出候条、来月朔日以後は新極印銀子を以商売可仕候。若当月已後、跡々取込候銀子取あつかひ候もの於有之は、可被処曲言旨被仰出者也依如件。

寛永十年四月十二日

横山山城守

本多安房守

覚

(2)一、御分国中取込候銀子、善惡不同に付而、此度被成御改、取込候銀子、朱染紙封に二步下之積りに被仰付候間、跡々より遣来候取込銀子上中下を見合、一統にふきなをさせ、新極印打遣可被申候。向後丁銀とつり合候様に可被申付候事、

(3)一、金沢町中におゐて、鑄成もの二人致吟味、吹所に可被定候、然は此以前之取込銀ふき直候刻、少も私曲無之様に堅為致誓紙、其上横目を出、有様に致裁許候様に可被申付事、

(4)一、当町天秤座之者共令極印、朱染紙封之銀子ふき来候条、今度取込候銀子も、右御定之通ふかせ可被申事、

近世前期における領国貨幣について(模本)

(5)一、新極印之儀、四ヶ所之ふきや一様にいたし可申候、其外に面々添極印を打、銀子不同に無之様に、吹所中為四人互吟味可仕旨申付事。

(6)一、越中之義は、所々金山より銀子出申候条、富山町中にふき所二ヶ所被相定可然存候。右御国廻御上使衆、近日可為御廻候条、急度相極候之様可被申付事肝要候 以上

寛永十年卯月十七日

横山山城守

本多安房守

稻葉 左近

堀 三郎兵衛

石川 茂平

右の二つの布達をみると、(1)において、従来今極印銀や今判金などと共に通用していた取込銀の使用を禁止し、売買には「新極印銀」をもつてすることを命じ、(2) そのためには、取込銀の品位を見合い、丁銀に釣合う新極印に吹き直させる。(3)このため金沢町中において慥なるもの二人を吹所に遣し、(4)金沢町の天秤座のものに極印をうたせ、(5)また四ヶ所の銀座、吹座にて銀子不同なきように互に吟味の上、鑄造し添極印を打つべきことを申し付け、(6)更に越中にては富山町中に吹所二ヶ所を相定めることを令している。

「新極印銀」は取込銀を吹直したものであり、領国の銀貨が統一的に「新極印銀」になったわけではない。むしろ「朱封銀」に従属して使われたものと思われる。

寛永十四年能州より宮腰着塩請弘之事⁽⁴⁾

塩高

一、五万二千二十八俵は

此内

二百五十俵は台所へ入

残高

五万七千七百七十八俵は寛永十四年四月九日より同十五年七月廿日迄払塩

此代銀

合三百十二貫九百卅五匁六分

朱封銀

内一貫六百七十目五分

新極印

新極印はこのように朱封銀と併用されているが、先に掲げた寛永十年四月の布達に「朱染紙封に二歩下之積り」とあり、同年六月の達示には「自今以後は朱封之銀子五歩下に吹立、新極印儲に打可申事」とあり、また寛永十五年八月、新極印停止の布達がだされた時には「但跡々新極印銀子にて直段申合候分は、最前如町定、朱封之銀子步入指引致算用、受取渡可仕候」とあって、新極印は朱封銀に対して二歩乃至五歩ほど低位であった。そして寛永十五年八月、新極印銀および取込銀の通用は停止され、九月五日より朱封銀一色となった。

近年於御分国中遣来候新極印銀子、並他国より相越候取込銀子遣候義、堅被成御停止訖。然者来月五日以後、朱染紙封之銀子を以商売可仕候。

しかし、取込銀の場合、完全に姿を消すということとはなかった。諸国の銀遣いが殆んど停止された元禄十年代以降ならともかく諸国の領国銀が遣われている段階では、取込銀の流入および使用を止めることは出来なかった。取込銀については、すでに寛永十年その使用停止が布達されているのに、寛永十五年再度その禁止令が出されていることをみ

ても、その廃止は簡単に行われなかった。むしろ取込銀はその後公認の形で遣われるようになったことは、承応三年八月の錢遣い関にする布告の中に「銀子之儀は今迄の如く極印銀・取込銀とも取やり可仕事」「一匁より上者、極印銀・取込銀両様共に遣可申事」とあることによつて知られる。

註

(1) 加藩史料卷二、八七〇頁の「朱封銀通用始之事」の頭

註に「朱封銀とは朱染紙を以て封せる銀子の意にして是より前にも間々見えたり、然れば今回の令は從來と異なる菊紋極印銀を朱封にしたるものを通用せしむるが爲に發せしものなり」とあり、「自他群書」卷之三(石川県図書館協会刊)には「(寛文九年)四月十日加越能三ヶ国

之貴賤遣用所の菊の紋の極印銀、自今停止せられ、極印銀を上げて大豆板銀に替可仕之、但当分は先朱封銀・丁銀

兩様共に取遣可仕候」とある。また「加藩貨幣録」には

朱封銀と丁銀の引替勘定帳が載っているが、その中に「右菊に次で文字之極印有之朱封銀御渡に付」とある。

(2) 一、去年敦賀へ御上米之内、其方与中敦賀弘とし御請

申候御米代銀、右取込を以一石に付銀二十六匁宛請取置

候処、今度御算用場より朱染紙符にて一石に二十四匁二

3 加賀藩における錢遣い

寛永以前加賀藩において錢が諸役錢につかわれていたことは、慶長十年六月、越中礪波郡の沖、院瀬見兩村の山錢二貫六百十文とあり、また同年十月の「能州塩釜納所方定」にも上上釜一枚に付二貫文宛、上釜一枚に付一貫五百

分四厘に相究、右取込銀歩入四分にして指上、并舟賃儀六分に於て被遣候間、指引究、相殘銀百姓方へ只今返相濟候上は、於後日申分有間敷所如件

寛永五年十月十日

田丸兵二判印

国吉村 才二郎

(加藩貨幣録 卷二)

(3) 加藩史料卷二、六九八頁、六九九頁

(4) 同卷二、八六八頁

(5) 同卷二、七〇三頁

(6) 同卷二、八七一頁

(7) 「確かに改作法は結果として、地方知行を全く形骸化し、十村体制を確定し、領内流通銀である朱封銀の流通を決定的にした」(佐々木潤之介「加賀藩制成立に関する考察」社会経済史学二四一二)

(8) 加藩史料、卷二、八七一頁

(9) 同 卷三、四一七頁

文、中金一貫百文、下釜七百文とあるによつて知ることができる。ところが寛永に入ると、先に触れたように「諸給人小役召置候事、其品々により最前相定直段を以、百姓手前より銀子に而可召置候事」（寛永元年二月）と、従来銀納であつた小役の銀納化が行われている。銀遣は前にも述べたように、それ以前からあるが、このような銀遣を更に進めたのは「こまがね」、「きりがね」の鑄造であつた。森田柿園は「加藩貨幣録」の中で次のように述べている。

寛永七庚午年軟挺銀製造を命ぜられ、此のさきより封内通用する極印銀等に取まぜ融通す、此は従来加能越三州錢貨を取暖はざる風俗なるに依りて、日用弁利の爲に命ぜられたりとぞ、此の銀をば俗にこまがねと稱し、或はきりがねとも呼べり（傍点筆者）

寛永七年の「軟挺銀製造」については他に徴すべきものが見当らないが、「こまがね」・「きりがね」が鑄造発行され、「日用弁利のため」朱封銀より、およそ一割五歩引の位で、小額の売買に使用されていたことは、次の資料によつて窺うことができる。⁽³⁾

就御尋乍恐申上候

一、酒一升 今升 此代取込銀七分宛
今升米二升四合代

右者当月十日より直段極り申候、米之直段一俵を小舛六斗五升与いたし、朱封十六匁、此歩一割半掛候而、こま、銀十八匁四分に成申候、（中略）

承応二年十一月廿九日

金沢酒肝煎 太郎兵衛

町御奉行様

（傍点筆者）

菊紋極印銀などが切遣いされていることは造幣局所蔵品などで知ることが、出来るが、「こまがね」・「きりがね」

近世前期における領國貨幣について（複本）

は最初から切銀用に、或いは細銀として鑄造された「花形極印切銀」や「しぶ銀」等の呼称であったと思われる。⁽⁴⁾そして次にみるように、錢遣いについての達示は屢々出されているが、少くとも承応頃迄は領内での通用は「こまがね」・「きりがね」をも含めた領国銀が主流であったようだ。先ず錢遣に関する達示を年代順に列挙すると、

(1) 寛永十年六月六日⁽⁵⁾

一、代物売買之事、貫錢之分者可為如御定候。小遣上錢者一貫文に付、新極印之銀子を以二十目之内外、相對次第候事。

一、小売之酒肴並青物・菓物・炭薪等、來七月十日以後銀子に而商売仕候事有之間敷候。何も可為錢遣事。

一、諸商売物不寄何、銀子一匁よりうちの物は可為錢遣事、但一匁より上之買物たりといふとも相對次第錢遣に可仕事

(2) 寛永十三年七月廿八日⁽⁶⁾

於江戸新錢・古錢売買之儀、如此御高札被出之条、自分以後御分國中錢遣、江戸可為如御定、銀子を以出し取仕候者、代物一貫文に付、銀十六匁之積を以可受用。若至相背御法度輩者、可被処曲事旨被仰出所也。仍如件

(3) 一、少分之売買之義は、御分国一統錢づかひに可仕事、

一、銀子之義、今迄之ごとく極印銀・取込銀ともとりやり可仕事、

一、錢近日上方より御取寄、問屋可被仰付事右被仰出者也

承応三年八月十六日

富永勘解由左衛門判

脇田 九兵衛判

町年寄十人

本町肝煎中^⑦

(1)は寛永通宝が鑄造發行される前の段階であるから、ここにみえる錢は鑓錢であるが、その相場は一貫文につき、新極印銀で二十目内外、歩引五歩として朱封銀では、十九匁位であったと思われる。そして酒、肴、青物等の売買は錢にて行ふこと、特に一匁以内のものは錢遣いすべきことを命じている。(2)は寛永新錢の發行された直後の達示であり、今後領国においても錢遣いすべきことを令している。ここで錢価についてみると、大阪における錢一貫文の銀に対する価値の変動は、寛永十二年二五匁、寛永十四年二四匁、寛永十五年二一匁、寛永十六、七年約十六匁、寛永十八、九年十二匁と急速に下落している。このことから新錢の出廻りが相当の規模と速度をもつて行なわれたことが推測される。(3)は、そのような状況のもとで出されたもので、「錢近日上方より御取寄」とあるように、錢遣いを大幅に行わざるを得ないことを示している。そして事実この頃から錢遣いが本格化したようである。

「御直言覺書^⑧」には「承応年中之始迄は、御領國中錢遣に而無之、白銀を細に切置きつかひ申候、又は米を小舛にて計候而売物等買整へ、日用を達申候、承応三年之比、御領國中も錢遣に被仰付候」とあり、「加藩貨幣録」卷三では「藤田安勝筆記に云ふ。承応の初頃までは、加越能三州とも錢遣ひ無之、白銀を細かに切置て日用の買物を整へて用向を達すと。……徳川幕府より布告せられ、鑓錢の善惡をば不可撰旨、寛永十年四月加能越州へ布達ありしかど、北国筋は錢貨を嫌ひ通用せずといへり」としている。

この錢遣いを実施するためには多額の錢を用意することが必要であり、そのため「錢近日上方より御取寄」ることになったのである。「加藩貨幣録」によればこの涉にあつたのが銀座彦四郎であるとし、次のような関係資料を挙げている。

錢高三千貫

近世前期における領国貨幣について(模本)

近世前期における領国貨幣について(榎本)

四四

一、五百貫 小松

一、千貫 金沢

一、八百貫 越中

一、七百貫 能登

× 三千貫

右之分にも可被仰付儀に御座候哉

九月十日

銀座彦四郎 判

承応三年錢三千貫文払之事

代銀合五十二貫九百六十三匁一分五厘 出目銀共右銀子度々上之、御算用相済也、依仰書替遣所如件

承応四年三月九日

津田 玄蕃 判
奥村 因幡 判

銀座彦四郎

承応四年三月御預け錢払代銀御算用之事

一、三千百七十二貫八百四十二文 請取高

代銀六十貫二百八十四匁四厘 上る

右御算用相済処如件

万治二年四月十三日 印

田辺佐五衛門 判印

高田弥右衛門 判印

野村治兵衛 判印

銀座彦四郎

このようにして準備された錢を「錢屋手前より売出し」一步の歩合をとっているが、その直段は承応三年九月、錢一貫文につき、極印銀十八匁⁽¹⁰⁾、同年十月、拾七匁三分⁽¹¹⁾、承応四年三月、十九匁⁽¹²⁾であった。なお「御藏江上候錢直段同前」であつた。

銀遣いを主としていた加賀藩において、錢遣いが前面にでてきたことは、寛永錢が全国的に流通する条件に連るものである⁽¹³⁾。そのことは更に云えば、加賀藩における農村構造の変貌、商品流通との関連における錢遣いの要求にもとづくものであろうが、これらに関しては今後あらためて検討するつもりである。

註

(1) 加藩史料卷一、九二二頁

(2) 同卷一、九二六頁

(3) 同卷三、四〇四頁「小松旧記」

(4) 「加藩貨幣録」卷四、「大日本貨幣史」附録・加州貨幣部

部

(5) 加藩史料、卷二、七〇三頁

(6) 同卷二、七九四頁

(7) 同卷三、四一七頁

(8) 中井信彦「幕藩社会と商品流通」一七九頁

(9) 加藩史料、卷三、四一八頁

近世前期における領国貨幣について(榎本)

(10)(11)(12) 同卷三、四二一、四二四、四三五頁

(13) 藤田五郎「封建社会の展開過程」、「一六六〇年代の、あの貨幣発行・流通と土地改革との密接不可分の社会事象理解のためには当代の直接生産者」農民について、彼等は一方自ら貨幣の流通を大いに必要とし、他方また彼等が直接貨幣の流通を必要とするくらいに成長しているからこそ、ともかく、一人前の農民になり得たのであるという関係を予め推察することができる」

五 領国貨幣の廃止

加賀藩において、その主たる領国貨幣たる朱封銀の通用を停止し、丁銀・小玉銀に切換えたのは寛文九・十年である。寛文十年は寛永通宝のみの使用を令し、以後他の銭を併用することを禁止した年であり、前節で述べたようにその背後には幕府銭貨の全国的流通があった。そして銭貨の統一だけでなく、銀貨の統一をも続いて実現しようとする意図を示すものと解されるのが、先にあげた寛文八年の狩野七郎右エ門の書上である。ここでは凡そ三十種にのぼる諸国灰吹銀と丁銀との換算率が示されているが、この引替灰吹銀をもとにして、丁銀・小玉銀の増鑄を計画したものと思われる。

田谷博吉氏は元禄改鑄の理由として奥御金蔵金を使い果たし、金銀分銅の過半をも吹潰してしまった幕府の財政における衰運、銀産出の減退、長崎を通ずる金銀の流出による金銀流通数量の減少、全国的市場圏の成立といった条件を挙げておられるが、寛文十年はそうした条件の出揃いつつある時期といえることができる。銀の輸出を禁止したのは寛文八年であり、また延宝から天和にかけて金銀分銅の過半が吹潰されたというから奥御金蔵金は、それ以前の寛文年代に消尽されたと推定される⁽¹⁾。しかも改鑄建議は寛文年中になされていることからみても、元禄改鑄の下地はすでにこの時期に形成されていたといえることができる。

寛文九年の加賀藩の朱封銀と丁銀との引替は、こうした状況の中に行われたものであり、引替の過程については田谷氏が「銀座書留」の「加州灰吹引替」を引用して説明しておられる⁽³⁾。それによると銀座は朱封銀と丁銀との交換率を金沢において二歩入レ、朱封銀を京都へ持参のときは二歩半入レで引替えることを約した。かくて寛文九年より十二年までの間に引替えた加州灰吹銀は一万三千百十八貫七百五十目であった。なお、この期間、朱封銀と丁銀の併

用を許可したことは、寛文十年四月の令文に「向後御分國中丁銀遣被仰付、先当分者朱封銀・丁銀同様共に取遣可仕候、朱封銀遣御停止之儀者、追而可被迎候」とあることでわかる。

領国貨幣から幕府貨幣への切替は、以上のように幕府の貨幣統一策の実現であるが、諸藩もまた幕藩体制の進行の中で、全国的流通力をもつ幕府貨幣に全面的に依存せざるを得なかったし、その結果、領国貨幣をも停止せねばならなかった。そして藩財政の内部にもその原因はあった。その一つは領内における金銀の減産である。加賀藩の場合も領内諸鉱山の衰微と領国貨幣の廃止とが深く結びついていることは「越中鉱山雜誌」⁽⁵⁾所収の各鉱山の由来書上申帳によつて理解することが出来る。

○「長棟山由来書上申帳」

鉛山始り之義ハ、寛永四年ハ鉛出申候……正保四年ハ銀山次第衰微山師及退転

○「虎谷山由来書上申帳」

虎谷加ね山々師根元之義ハ、松倉山々師之内仁兵衛と申者、元和元年三月之頃、隣在鉢村領之内、三枚六両と申所ニ而、金鉉見出し五六間堀込候所、大かね持へ取付、……御運上銀万治年中之頃、過分上納仕……寛文年中之頃ハ、山も不盛ニ罷成、家数も年々退転仕……

○「河原波山由来書上申帳」

慶長年中之頃ハ、加ね山大盛仕、御運上銀夥敷上納仕由ニ御座候……加ね山盛之時分、家数三百六拾軒余有之……其後寛文之頃ハ、少々宛加ねも薄らき不繁昌ニ罷成、夫ニ応シ家数も次第ニ退転仕……

○「亀谷山由来書上申帳」

天正六年之頃加ね鉉見出……夫ヨリ段々山盛リニ罷成、元和年中之頃間歩一口ヨリ御運上三十日切ニ貳百枚ヨリ三

百五拾枚宛上納仕候由……其後山少衰、寛文中頃ヨリ次第不繁昌ニ罷成候得共、宝永之頃迄ハ不絶年々御運上銀上納仕申候。……元禄之頃ヨリ山師段々困窮仕、外稼無御座ニ付、山之尾先等間歩所江相障不申場所ニ而、焼畠等少々宛仕候……

○「松倉山由来書上申帳」

慶長年中之頃、加ね山盛申時分、御運上銀一ヶ月判金間歩一口〆三百枚、五百枚宛上申間歩も御座候……万治年中之頃〆、少々山衰御運上銀増減御座候、夫〆宝永年中迄御運上銀少々宛指上申候……

○「吉野山由来書申帳」

寛文七年拾歩一役銀、御運上銀、一ヶ年二百貫目上り申夏モ御座候、其後延宝年中一統大飢饉御座候節、他所〆相集候山師、散々ニ罷成、相残ル山師六拾軒斗ニ相成申候、元禄元年〆十四年迄、御運上銀高減少仕、三拾貫斗上り申候、宝永年中之頃迄ハ、御運上銀モ少々宛、年々上り申候……

右の書上帳にみられるごとく、吉野山を除いては殆んど寛文期迄に衰退している。このことは各鉱山の運上銀の増減によっても明瞭である。例えば「寛永拾八年分御金山方御帳」には

朱符銀

一、四拾五貫目 亀谷幾兵衛、三郎左衛門、十右衛門間歩御運上

同

一、五拾貫目 亀谷弥三郎、加右衛門、甚右衛門間歩御運上

とあり、亀谷鉱山中、右の間歩だけで朱封銀九十五貫目に相当する運上を出しているが、寛文三年には四貫目、同五年には百目、同八年には九百目と運上銀が減少し銀産出の衰微したことを物語っている。次表は各鉱山の運上銀を

「越中鉾山雑誌」の資料にもとづいて作製したものである。但し時期は統一的な領国貨幣の創出された寛永期より朱封銀停止の寛文までとした。

越中諸鉾山運上銀

(単位 貫)

	龜 谷	吉 野	虎 谷	松 倉	河 原 波
寛永1					
2					
3					
4					
5					
6					金2両
7					0,110
8					金2両2分
9	貫				
10	80,000				
11	21,500				
12					
13					
14					
15					
16	10,000				金5両
17	30,000	0,450			
18	95,000	0,450		37枚11両	金2両2分
19		0,500	0,600	21,700	
20				4,060	
正保1					
2	17,200	0,400		1,210	
3		0,330	0,200	2,560	
4	10,800			10,090	
				2,480	
慶安1	0,500	0,300		26,820	
2	3,000			11,150	
3				21,700	
4		27,760	0,040	6,830	
承応1		1,000			7,960
2					
3					
明暦1		0,200		5,7000	
2		2,750			
3		1,550			
万治1		0,250			
2		6,450	0,300	7,500	
3		1,200		5,200	
寛文1	0,100	0,750		10,800	
2		0,650		6,900	
3	4,000	0,550		7,000	
4		0,550		9,300	
5	0,100	3,000		4,750	
6	0,190	43,330		4,084	1,600
7		50,430	2,200	15,200	
8	0,900	9,030		3,900	
9		2,930		1,700	
10		0,830		0,100	
11		0,061		0,300	
12		0,080		0,500	

資料 (55号)

ところで公貨たる丁銀及び小玉銀に切換えられた以降でも領国銀が使用されている形跡がみえるのは、どのように解釈したらいいであろうか。例えば秋田藩では元禄金銀の鑄造発行された元禄八年の翌十二月に極印銀使用停止となり、十二月中に極印銀・丁銀・小玉銀の取合わせ使用となり、最終的には、この年限りで極印銀の通用が停止される

近世前期における領国貨幣について(根本)

ことになった。⁽⁸⁾現に元禄九年十二月の売人証文「永代売渡す女せかれ事」では「小玉銀拾四匁四分五厘」となり、元禄十五年十二月十二日の質人証文でも「小玉銀六拾匁」となっており、それ以後宝永にかけて鈴木文書(羽後町)にみえる、そうした証文の質金は、すべて小玉銀である。⁽⁹⁾ところが享保四年の鈴木文書(横手市)の中に新金、新銀とならんで極印銀百目がみられる。⁽¹⁰⁾

証文之事

一、金壹歩判六拾粒 新金也

但乾壹歩判百貳拾粒ニ而

一、銀平目四百七拾五匁 新銀也

一、極印銀平目百目

右者御下国前江戸御入用就御差支今度御取替候、追而御返済可有之候、仍証文如件

享保四年亥四月二日

山方太郎左衛門

小野岡 市太夫

宇野宮 帶 刀

鈴木惣左衛門殿

また米沢藩の領国銀が幕府の諸国通貨整備策によって通用を停止せしめられたのは元禄九年である。米沢藩では領国銀として上銀と町銀があり、その間に七歩の歩合をおいて換算していた。⁽¹¹⁾ところが町銀の方は給人方納帳やその仕方などに後々まで残っている。例えば文久元年の「岩瀬知行帳」とか「知行收納之事」など、⁽¹²⁾⁽¹³⁾それであるが、その一部をあげると、

代方

(岩瀬知行帳)

一、三百六拾文 本錢

一、拾八文八分 口錢

一、五拾四文 高夫錢

一、四拾八文六分 入木足前錢

ノ四百七拾三文四分

三拾毫匁七分七厘

町銀 三拾三匁七分七厘

知行収納之事

一、高百石 給人本取

物成四拾八石 免四ツ八歩

(中略)

一、毫門半 代毫匁五分 門松

米搗人足毫人半但三月詰ノ右代式匁式分四厘八毛

ノ 拾毫匁八分三厘八毛

合 三百八拾七匁五厘壹毛

右者町銀百石分小役共ニ

近世前期における領国貨幣について(榎本)

ついで加賀藩の場合をみると、先に述べたように同藩の切替は寛文末年であるが、「加藩貨幣録」には享保十六年と寛保元年の二度にわたり、退蔵されていた多額の朱封銀が丁銀に引替えられた史料が載っている。⁽¹⁴⁾

このように切替後であっても一部の領国銀が流通し、或いは多量に退蔵される場合があった。しかし米沢藩の場合、ここで町銀何匁とあるのは、古来の基準がそのまま後世まで残り、その基準に相応する丁銀か銭が実際には使用されたものと考えられる。先にあげた「岩瀬知行帳」の場合でも割付には町銀とあっても納入の方には、「八月朔日 済 壹匁 銀方……貳拾五匁貳分 銀さし向 新知銀三拾壹匁四分」などとあって町銀の記載はみえない。また享保年間の「笹野観音通夜物語」⁽¹⁶⁾には「中古天和貞享の頃より銀遣ひは一式御停止に被仰付、只今錢にて銀目に直し上納する事に候」とあり、「町銀一匁ハ錢何十何文と御定」めて一定銀目に応じた錢を上納することが後々まで続いたようである。このようなケースは米沢だけでなく、諸国にもあったようである。⁽¹⁷⁾

註

- (1) 田谷博吉「近世銀座の研究」
 - (2) 「三貨図彙」卷十二、田谷、前掲書
 - (3) 田谷、前掲書
 - (4) 「加藩貨幣録」一〇二頁
 - (5) 小葉田淳「日本の貨幣」、「鉱山の歴史」
 - (6) 「金沢藩では安永七、八年に郡方に触れて領国内の諸産物調理帳なるものを提出せしめている。これは窮乏化した藩財政の対応策の一環として意味を持つものである。越中の七鉱山からも文化八年に、それぞれ由来書上申帳を指名した。越中鉱山雜誌五巻は、これらの上申帳
- をはじめ、箕浦氏の時代(宝永頃)の調査書等を集成したものである」(小葉田淳氏解説)。なお天理図書館本を底本とした富山県郷土史会叢書第三冊を使用した。
- (7) 「越中鉱山雜誌」資料番号八十三
 - (8) 秋田県史、第二巻、近世編上
 - (9) 秋田県史、資料近世編上、(六〇四)、(六〇六)、(六〇七)、(六〇八)
 - (10) 同、(四四〇)
 - (11) 「米沢銀の流通」(藩制成立史の総合的研究)
 - (12) 米沢市立図書館所蔵
 - (13) 「要情秘録」同館所蔵

(14) 「加藩貨幣録」卷三、によれば、享保十六年には五千貫、寛保元年には三千三百貫余が京都銀座役人立合いのもとに丁銀に引替えられている。

(15) 例えば「諸庁根元記」には「……右林に相当候山年貢納帳之上ハ御取立ニ相成候ニ付銀方帳之上ニ而払ニ相立候上銀百匁分町銀ニテ百七匁ツヽ相払候御取上ニ相成候ハ宝永年中ニ候由」とある。

(16) 米沢市立図書館蔵

(17) 例えば糸魚川の領国貨幣については「諸国灰吹付」に位付について「高田ト同ジ」とあり、「明和八年諸国灰吹寄」には「イト井川 式割引 亀甲ノ間ニ模様アリ」とある。ところが「御用留帳」(町年寄、小林家文書)の享保、元文、寛保、延享、寛延、宝暦年間の条には下銀

ま と め

以上、主として東北諸藩および加賀藩の領国貨幣についてみてきたのであるが、そこで指摘できるのは次の点である。極印灰吹銀を主とする領国貨幣は近世前期を通じて広汎に存在したが、それは各領国経済にとって必須なものであったからである。研究史的にみて従来領国貨幣について関心の払われなかった荘内藩のような場合でも、その領内にはやはり荘内上銀をはじめとする領国貨幣が流通していた。しかもそれらの領国貨幣は秋田藩の場合のように、江戸まで現送されている。また津軽藩では次銀と呼ばれる領国貨幣が広く流通し、銭貨が使用されるまでは、きわめて

の文字が数多く見える、また天明四年の「年貢米納帳」にも拾九俵但老石ニ付下銀九拾七匁余とある。越後には糸魚川の外に長岡、新潟、高田、村上などの諸銀があったが、これらが停止されたのは元禄九年秋(三貨図巻二十)である。とすればここに見える下銀は、表向きに停止に拘ず通用していたものか、或は米沢のように、単に基準として残ったものか、ということになるが、やはり後者であろう。「寛保二年六月十一日、馬喰手形銭但馬喰老人に付下銀老匁つ」とあるが、この一匁は「下銀老匁ニ六拾貳文」「下銀老匁ニ六拾四文」「下銀老匁に五拾八文替」と頻繁にでてくる銭によって支払われたものと思われる。(小林家文書中の下銀については、鶴岡実枝子・鎌田永吉両氏のご教示による)

少額のもので領国銀が使われたが、それらは領内で幕府貨幣に交換されて江戸に送られている。

領国貨幣は、その領内で通用するのが原則であるが、加賀藩の場合には多量の取込銀が流通し、統一的な領国貨幣が鑄造発行されても、その流通は止まなかった。他領でも同様なことがあったが、それは領国貨幣が銀という地金そのものの価値に主として依存するからであり、そのため極印の無い灰吹銀の通用することも間間あった。

しかし広汎に存在した領国貨幣も幕府貨幣の統一的性格が強化される過程で、ある領国では寛文以前に、そして大部分のものは寛文から元禄にかけて廃止されていった。それは寛永通宝と幕府金銀貨幣が大量に鑄造発行される時期でもあった。

